

英語の変遷

3年2組 25班

研究要旨

古期英語についての文献を参照し、古期英語から現代英語に至るまでの変遷を調べた。その結果、現代英語に至るまでには古英語、中英語、近代英語という3つの段階があり、それぞれに違った特徴があり、またそれぞれに間には大きな変化があることがわかった。

1 はじめに

現代の国際社会において、英語はもはや必要不可欠なツールとなっている。そこで私たちはそもそも英語とはどのようにしてできた言語なのか、といったところから現代英語に至るまでの変遷、他言語との相関を調べた。

2 研究手法

(1) 英語が変化してきた理由として二つの仮説を立てた。

- ① 英語は今よりも単語の変化が激しかった。
- ② 英語はゲルマン語に由来している。

(2) 英語の歴史書を参考に史実の追及を試みた。

これらの予測をもとに考察し未来の英語の変遷の可能性について考えた。

3 結果・考察

英語の歴史書を参照すると、決まってブリテン島の民族の歴史から始まる。ヨーロッパの北西部にあるブリテン島は、現在グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国、通称イギリスが統治しているが、有史前のブリテン島には、イベリア人と呼ばれる民族が住んでいたとされている。彼らはもともと地中海沿岸に住んでおり、ストーンヘンジ宮殿に代表される巨石文化を残したことで知られている。また、彼らは平穏な民族であり、争いを好まなかったとされている。この民族の性格が災いしてか、紀元前6世紀から4世紀にかけて、ブリテン島にケルト人という民族が侵入してきて、イベリア人にとって代わった。彼らはイベリア人とは正反対に好戦的な民族で、体は頑丈であったが、神経が過敏で、忍耐力に欠けていた。また彼らは体つきががっちりしていたため、体に刺青をいれることができた。これにより島は「刺青した人々の国=Britain / Brython」と呼ばれ、これがブリテン(Britain)の語源となった。しかしケルト人は前述のような性格のために大きな事業を残せず、410年頃にブリテン島に侵入してきたアングロ・サクソン人にとって代わられてしまう。アングロ・サクソン人は元来デンマーク周辺に住んでいた3つの民族、アングル人、ジェート人、サクソン人からなる民族である。その中のアングル人(Angles)は「England」という言葉の語源になったといわれる。この「アングロ・サクソン人の言語」に、11世紀初めにイングランドを支配したデーン人が持ち込んだデーン語の要素が入って、成立したものが、「古期英語」といわれている。この「古期英語」から「現代英語」までのそれぞれの時代の英語の特徴と変遷を述べていく。

(1) 古英語(5世紀～12世紀)

前項で述べたようにして成立した「古英語」は、英語史上では最も長く続いた英語の形式である。ここでは、「名詞・代名詞・」「形容詞」「動詞」という品詞に分けて、それぞれの特徴を説明していく。

まず、名詞と代名詞について述べる。現代英語では名詞は数によってのみ変化するが、古英語では数の他に、格、性においても変化していた。まず格には、主格、属格(所有格)、対格(目的格)・与格・具格の5種類の変化があった。主格は主語のとき、属格は所有格の代名詞がつくとき、対格は目的語のとき、というように変化をする。与格と具格は間接目的格とも呼ばれ、例えば「*hringa paem cyninge*(=*rings for the king* : 王のための指輪)」という文がある。このとき「*cyninge*」が与格の名詞である。このように、与格には「*for*(~のために)」の意味が含まれている。具格は手段の目的語、道具目的語とも呼ばれ、「*by*(~によって)」の意味を含む格である。しかしこの具格は、次第に与格と同化していき、自然消滅した。次に、性による変化について述べる。性とは性別のことであり、男性、中性、女性というように分かれていた。中性とは、「人間以外のもの」を表すときに使われる形であるが、古英語においては男性名詞と中性名詞の語尾はだいたい同じである。代名詞も名詞と同様に、数・格・性によって変化するが、古英語の代名詞には単数、複数の他に「両数」というものもあった。これは「*git*(*you two*=あなた方2人)や「*wit*(*we two*=我々二人)」というように、二つの事物をまとめて表現できるものだった。しかし、「両数」はあまり使われなくなっていった。

形容詞には、変化が強いものと弱いものがあり、強いものは、*this flower is beautiful* のように叙述用法(主語の状態を述べる用法)で使われ、弱いものは *This is a beautiful flower* のように限定用法(目的語の状態を述べる用法)に使われるというように用法が使い分けられていた。動詞にも強変化のものと弱変化のものがあった。強変化動詞は現代英語における不規則変化動詞にあたるが、当時は弱変化動詞(現代でいう規則変化動詞)よりも数が多かった。例えば“*steal*”という強変化動詞には、<表>に示したように、単複の区別を含めると17種類もの変化があった。

THE LAUD MS.

(E)

Brittene ígland⁹ is ehta hund mila lang. 7 twa hund brad.
7 her sínd on þis iglande fif geþeode. Englisc. 7
Brittisc. 7 Wilsc. 7 Scyttisc. 7 Pyhtisc. 7 Boc Leden¹⁰. Erest
weron bugend þises landes Brittes. þa coman of Armenia. 7
ge sætan suðewearde Bryttene ærost. þa ge lamp hit þ Pyhtas
coman suþan of Scithian. mid langum scipum na manegum. 7
þa coman ærost on norþ Ybernian up. 7 þær bædo[n] Scottas þ
hi ðer moston wunian. Ac hi noldan heom lyfan. forðan hi

↑古英語で書かれた文章

活用	人称・数	'steal'
不定詞		stelan
		tō stelanne
直說法現在	一人称単数	stele
	二人称単数	stilst
	三人称単数	stilð
	複数	stelap
直說法過去	一人称単数	stæl
	二人称単数	stæle
	三人称単数	stæl
	複数	stælon
仮定法現在	単数	stele
	複数	stelen
仮定法過去	単数	stæle
	複数	stælen
命令法	単数	stel
	複数	stelap
現在分詞		stelende
過去分詞		stolen

← 〈表〉

中英語(11世紀～16世紀)

時は1066年、ノルマン朝の王にノルマンディー公ウィリアムが即位し、ウィリアム1世となった。このとき「ノルマン＝コンクエスト」によってイングランドが支配され、フランスの北方方言である「ノルマン＝フレンチ」の語彙がイングランドに大量流入した。これによって古英語は衰退・消滅し、新たに成立したのが「中英語」である。

この大量流入の背景には、ウィリアム1世が軍事力を用いて英国に侵攻し、英国を支配したことがある。理由としては「ノルマン朝は元々フランスの王朝であり、上流階級の人々はフランス語を話さざるを得なかった。」という説や、「元々フランス語の中にゲルマン系の言語が多く侵入しやすかった」という説などがある。

古英語と中英語の違いには、語彙の量の他にも、文法面での変化もある。まず、名詞では複数形

の語尾として「s」が一般形しこれが現在に至るまで続いた。代名詞に関しては古英語とほぼ変わりなかったが、動詞については、古英語における強変化動詞の多くが弱変化動詞に変わっていったという変化があった。また、一人称、二人称の語尾「e」が消滅して三人称の語尾「s」だけが残り、その語尾消滅によって動詞と名詞が形の上では区別がつかなくなったため、名詞の動詞化(book : 予約する、face : 直面する、hand : 手渡す、など)が起こった。これにより現代ではかなり自由に名詞を動詞として用いるという英語の特色ともいべき現象が生まれた。また、これにより、古英語の特徴であった「屈折語尾」はなくなっていった。

近代英語(16世紀～18世紀)

14世紀、全欧に権威をふるった「ペスト(黒死病)」は、英語にも影響を及ぼした。それが「大母音推移」という現象である。現代では、ほとんどの言語において発音と綴りが一致しており、一定の読み方しかしないが、英語は違う。それは、14世紀から16世紀の200年間、言語学的に見れば極めて短い期間で英語の発音が変化した「大母音推移」のためである。

例えば「name」という単語がある、現代の我々であればこれを「ネーム」と読むだろうが、大母音推移以前は「ナーメ」と読んでいた。つまり、大母音推移とは、古・中英語期において発音と綴りが一致していた語が、一致しなくなった現象のことである。このような語は他に、time(ティーメ→タイム)、now(ヌー→ナウ)などがある。

これがペストと何の関係があるのか。それは、あくまで一説ではあるが、ペストが大母音推移の原因になったといわれているからである。なぜペストの流行によって大母音推移が起こったのかは定かではない。しかし一説によれば、ペストによって、英国の下層階級や、労働者階級の多くが犠牲となった。これによって、労働者はより高い賃金を求めて移動するようになり、経済状態は向上した。それに伴い彼らの話す英語の重要性も高まった。他方では、貴族の生活の維持は困難になり、中世の封建制度は崩壊していく。これにより、貴族が話すフランス語は衰退、労働者階級の話す発音と綴りの一致しない大衆英語が広く話されるようになったのである。

現代英語 (18世紀～)

近代のイギリスでは、英語の標準化への気運が高まっていった。それには2つの理由がある。一つは、長年ラテン語やフランス語に抑圧されてきた英語の地位が向上してきたことによって母国語への関心が高まったこと、もう一つは、数々の作家たちが文学語としての基準を作り上げようとしたこと、要するに、雑多な方言を廃して共通語を作り上げようとしたことがある。18世紀になると、その気運はさらに高まっていく。イギリスの詩人ジョン＝ドライデン(1631～1700)は、「英国には一定の作詩法も、是認されるような辞書も、文法もない、まったくの野蛮の状態である」と主張した。英語の標準化には多くの人々が貢献した。例えばサミュエル＝ジョンソン(1709～1784)は7年という短期間で「A Dictionary of the English Language」という辞書を誰の援助も借りずに作り上げ、大きな反響を呼んだ。その辞書は現代の基準からすればいくつかの欠点があったものの、十分是認されるものであり、またこれの出版から100年経っても、これを凌ぐ辞書は現れなかった。

ジョンソンの辞書の他にも多くの文法書が出版され、基本的文法の確立が行われていった。

また、新しい文法も出現した。get, grow という動詞に「～になる」という受動態の意味が追加され、また動詞と副詞による複合体「bring about: もたらす、catch on: 理解する、give out: 配る、など」の「群動詞」も発達した。またこの時代には、新大陸の発見、科学技術の発達、戦争などによっておびただしい数の新語が流入し、さらに現代の英語に近づいてきた。

アメリカ英語（17世紀～）

17世紀、アメリカがイギリスによって植民地化され、本国からの移住者とともに英語が流入していったのは言うまでもない。その後、アメリカという国の発達によって英語も本国とは異なる発達を遂げ、アメリカ英語といわれる英語が成立していった。

アメリカ英語はイギリスに比べると方言が少なく、かなり統一されている。それは、前項で述べたように、英語標準化への気運が高まりつつある時期に、その第一線に立っていた者たち（シェークスピアなど）がアメリカへ渡っていったからである。しかしそのような者たちがアメリカへ渡っていったからといって本国と同様に英語が発達するというわけではなかった。当時のアメリカ英語は17世紀の本国英語であり、それが本国からの影響を受けないままに200年以上にわたって生き続けたため、本国では廃れた語がアメリカでは生き続けるという事態が起き、これが英米間の英語の差異を生んだ。例えば「sick」という単語は、アメリカ英語では「病気である」という意味だが、本国では「胸がムカムカする」という意味であり、病気の意味での用法では用いない。他にも「秋」の意味で「fall (アメリカ)」と「autumn (イギリス)」、「～と思う」の意味でアメリカでは「I guess～」を使うことがあるが本国では17世紀ごろまでに廃れている。

また、アメリカ英語ではなるべく言語を簡略、明確にしようという努力があり、綴りにも差異がみられた。例えば「honour」のuを落として「honor」、「theatre」を「theater」、「axe」を「ax」というように簡略化されていった。

4 結論・展望

今回英語史について調べて英語は現在の英語に至るまで、ケルト人、ノルマン人をはじめとする様々な民族の文化、風俗、習慣の影響を受けており、それぞれの民族のものの考え方の影響もうけていることがわかった。現代では戦争の減少によって外国人や外国語の大量流入は少なくなっているので、この状態が続けば英語の大幅な変化はほとんどないと思われるが、世界情勢の変化によって英語が大幅に変化する時代が到来する可能性も否めない。また科学技術の進歩によって、それに関する新語もこれから増大していくことだろう。将来私たちが英語を用いて仕事をするときに自分たちは多くの民族の考え方にたつてものを考えているのだという自覚をもち、そのような考えのもとでよりよい考えを生み出していけるよう努めていきたい。

5 引用・参考文献

「英語を学ぶ人のための英語史」